

谷岡亜紀、俵万智の近刊歌集 黒岩剛仁

私にとって長年の同志とも言える、谷岡亜紀、俵万智の近刊歌集について書いておきたい。

谷岡の第五歌集『ひどいどしやぶり』は、来年二月に贈呈される第二五回若山牧水賞に決まった。本歌集は、三つのパートで構成されている。私には、それぞれ明快なテーマ設定がなされ、割と少ない歌数の連作が集められている。「Ⅱ」のパートが特に味わい深く思われた。

- ・黎明のウツド・ベースの低音の弦の響きに都市は明けゆく
- ・屋上にアルト響かせ金管に鈍き夕日を映すサククス
- ・チェロを弾く宮沢賢治フクロウの羽ばたくごとし樫の木の下
- ・褐色に乾いた道の白昼にカスターネットの音のみ響く
- ・チェンバロの余韻は空に消えゆきて夏の大聖堂の静寂
- ・夕映えのシンバルやがて鳴り終えて石壁の街影深めゆく
- ・円柱の並ぶ広場に日没を告げて流れる風の組鐘カウゾウ
- ・音や音楽の世界に疎い私だが、思わず「風の組鐘」と題された連作の七首全てを引いてしまった。オノマトペは全く使われていないが、一首一首に歌われた楽器たちの奏でる音が聞こえてくるようだ。他に、福岡ドームが舞台だろうと思われる野球の連作「雲の行方」も、「野球小僧」の私には愉快な一連だった。

「Ⅰ」「Ⅲ」のパートからも、一首ずつ引く。

- ・街上に地球の自転の速度にて静かに昇る月を嘉するよみ
- ・待つ人のいるを信じて小雨降る夢の隘路の角を曲がりつ

次に、俵の第六歌集『未来のサイズ』。この歌集も、奇しくも谷岡の歌集と同じく「Ⅰ」から「Ⅲ」の三つのパートで構成されている。「Ⅰ」は今年のコロナ禍の作品でまとめられており、中には先月引いた「歌壇」七月号の作品も含まれている。そこで、ここでは「Ⅱ」と「Ⅲ」を読むこととする。

- ・夜に咲く花の匂いのねっとりりと味つけをしたような川風
- ・翌日はもう伸びており草刈は髭剃り程度と知る島の庭
- ・転びたるリレー走者を追いついた二人が起こす大運動会

二首目に「島の庭」とあるが、「Ⅱ」は石垣島で暮らした五年間の作品である。「ねっとり」と味つけをしたような」との比喩は俵ならではのものだと思うし、三首目には島の人々の気風がよく表れている。

- ・集中は疲れるけれど夢中なら疲れぬと言い遊びつづける
- ・そんな島での暮らしの中で発せられた、恐らくは「子息の名言」

勉強に集中するのは疲れる行いだが、夢中になって遊んでも疲れることはないと言うのだ。うーむ、なるほど。

- ・制服は未来のサイズ入学のどの子どもどの子ども未来着ている
- ・世界まだ知らぬ息子が暗記するアンデス山脈パチカン市国
- ・子のために切りあげることなくなつて一本の紐のような一日
- ・プレミアムモルツ飲みたくなるような病名を聞く初夏の病院

「Ⅲ」は、宮崎に転居してからの作品。一首目は書名が取られた歌で、三首目の背景には子の寮生活があり、最後の歌では自らの病にも触れる。どうかくれぐれも大事にして欲しい。